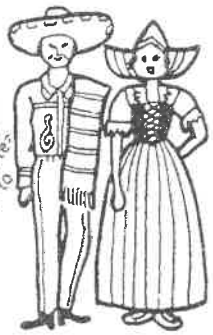
地球市民



江別ユネスコ協会会報　第５７号（2024・1・22）事務局・江別市教育委員会生涯学習課内

ハリオアマツバメの謎

生物多様性の保護を学ぶ講演会

江別ユネスコ協会は、市内に野幌森林公園があり、道央の農業地域でもあって、生物多様性の保護には関心が高いので、今年は「世界最速の鳥」ハリオアマツバメの研究で高名な森さやか先生（酪農学園大・准教授、農学博士東大）の講演会を、6月20日（火）18：45～20：30、野幌公民館で開催しました。

演題は「世界最速級で飛ぶハリオアマツバメの謎の生態に迫る」。この鳥はアマツバメ科に属する渡り鳥で、ツバメとは全く違う種類です。余り聞きなれない名前の鳥ですが、北海道、長野県、岐阜県等でよく見られ、札幌では豊平区の西岡水源地で、飛びながら池の水を飲む姿が観察できます。

日本ではアマツバメ科の鳥は、アマツバメ、ヒメアマツバメ、ハリオアマツバメの３種が見られ、一日中空中を飛び、飛びながら虫を捕食し、繁殖期には飛びながら交尾しますから、生態を観察することが難しい鳥です。ちなみに中華料理で珍重する「ツバメの巣」は、インドネシア等に住むアマツバメ科のジャワアナツバメの巣が使われます。

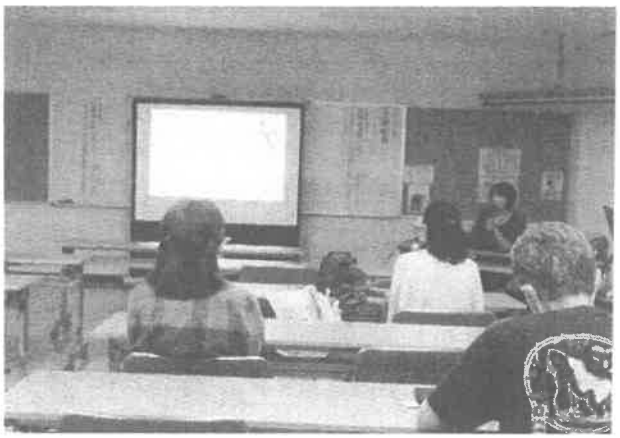
ギネスブックには「水平飛行が世界一速い鳥」として登録されており、時速170キロという速さが記録されています。

2015年からこの鳥の研究を始めた酪農学園大、長崎大、慶応大などの研究チームは、十勝地方の生息地に設置した巣箱に巣を作った５羽に、0.5グラムほどの移動記録装置を取り付け、翌年再び戻ってきた４羽から記録装置の回収に成功して、そのうち３羽の渡り経路を解明しました。

その調査によると、秋の渡りは8～9月ごろ北海道から本州へ南下して、太平洋に出たあと、朝鮮半島または黄海や南シナ海を横切って、中国大陸へ渡り、さらにフィリピン、ニューギニアを経て、12月にはオーストラリア東海岸に到着します。12月～3月をそこで過ごし、春の渡りは４月ごろオーストラリアを北西に移動してインドネシア付近から南シナ海を渡り、日本へ戻ってくることが分かりました。地球一周分に当たる約４万キロのコースです。

今回の講演会で、この鳥の意外な習性や個体数が激減していること、巣を作るには大きな樹洞（木の穴）が必要で、繁殖を助けるため木材で巣箱を作ると１メートル超の大きな箱が必要になることなど、苦労話も含め、森先生の研究室で明らかにした貴重な研究成果を紹介して頂きました。出席者は生物多様性の保護について多角的な学習をして、環境問題の重要性を再確認しました。

▼渡り鳥の多様性保護を語る森さやか先生



沸騰する地球に人類の知性を
～2024年の年頭にあたり～

江別ユネスコ協会会長　押 谷　一

会員の皆様、あけましておめでとうございます。新しい年をお元気に迎えられたことと存じます。

年頭にあたりご挨拶を申し上げ、2023年を振り返ってみたいと思います。一昨年2月、国際法に反してロシアがウクライナに武力侵攻を開始し、まもなく2年が経過しようとしていますが、解決の糸口は全く見えない状況にあります。

さらに、昨年秋には、パレスチナを実効支配している武装勢力ハマスがイスラエルに大規模な攻撃を仕掛け、その報復によって双方の多くの人命や財産が奪われ、さらにアフガニスタンなどでは傷つき抑圧された人々が大勢います。

ユネスコ憲章の前文には「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かねばならない。」さらに「平和が失われないためには、人類の知的及び精神的連帯の上に築かれなければならない。」と書かれています。改めてユネスコのすべての人々と共に平和を実現していかねばなりません。

一方、昨年の夏は、北海道をはじめ世界各地は異常な高温に見舞われました。グテーレス国連事務総長は、もはや地球は「沸騰」しており、速やかに対策を講じなければならないと重大な懸念を述べました。

このような厳しい状況を解決するために国際社会が約束したSDGs 17の目標達成に残された時間は6年間しかありませんが、すべての目標とも達成することは困難な状況にあります。しかし、ここで対策を講じなければわたしたちは「持続可能」ではなくなります。改めて一人ひとりが問題意識を持ち、そして総合的な政策の下で行動しなければなりません。

このような厳しい状況のなかですが、わたしたち江別ユネスコ協会では、コロナ禍の制約がなくなり、12月に学習会を開くことができました。ユネスコの無形文化遺産として登録されている日本の「和食：日本人の伝統的な食生活」の魅力や課題について、札幌国際大学教授・遊佐順和先生の講演をいただきました。

また、日本ユネスコ協会連盟から活動助成金をいただき、小学5・6年生を対象にした「ユネスコ科学教室」を二日間にわたって開催しました。地球温暖化の仕組みや、普段何気なく飲んでいる水のこと、北海道の動植物の生態系のことなど、酪農学園大学の先生方のご協力によって豊かに学ぶ機会をつくりました。日本ユネスコ国内委員会においても、ユネスコスクールをはじめ、ユース（若者）に対する教育や積極的な参加を呼び掛けており、今後も活動の輪を拡げていきたいと考えております。

今年も江別ユネスコ協会では、一層、活動を拡げて参りますので、会員の皆様の一層のご理解とご協力をお願いいたします。併せて周囲の方々にユネスコのことを話していただいて、入会を呼び掛けていただければ幸いです。

末筆になりますが、これからが寒さは本番を迎えます。くれぐれもご自愛の上、お過ごしになるよう心よりお祈りいたします。

北海道の昆布の多様な食文化
和食の魅力を考える市民学習会

無形文化遺産保護条約に基づいて、2013年（平成25）に「和食：日本人の伝統的な食生活」がユネスコ無形文化遺産に登録されました。和食の①多彩で新鮮な食材とその持ち味の尊重、②栄養バランスに優れた健康的な食生活、③自然の美しさや季節の移ろいの表現、④正月などの年中行事との密接な関わり、の4項目がユネスコへ推薦し

た政府の掲げた和食の特徴です。しかし、私たちの食生活は和食の良さを活かしているでしょうか。

江別ユネスコ協会は、12 月 1 日（金）18:00～19：30、野幌公民館で市民学習会を開催し、札幌国際大の遊佐順和教授に講話をお願いしました。テーマは「和食の魅力～多様な食文化を育む北海道の昆布を中心に～」でした。

昆布の生産量は、国内の天然物の 95%以上、養殖物の 75%を北海道が占めています(2021 年度)が、消費量は比較的少ないのが現状です。総務省の家計調査によると、昆布消費量の多い都市は富山市、福井市、青森市で、沖縄県の那覇市も意外と上位です。沖縄県は昆布を中国へ輸出するための中継地点だったので、今でも消費量が多いのです。

佃煮、昆布巻など加工食品の消費量が多いのは、北陸から大津市、京都市、奈良市など近畿の諸都市で、古くから日本海航路で活動した北前船によって昆布が多く流通し、大阪市などに独特の消費文化と加工技術が発達しました。

▼和食の魅力と昆布の役割を語る遊佐先生

この昆布の高度利用が日本料理の伝統が生まれる基盤になり、各地に伝わって多彩な郷土料理を発達させ、豊富な魚介類や季節の農産物を活用した「うま味」を特色とする日本人の食感の世界が出来あがったものと言えます。

この学習会の出席者は熱心に聴講し、北海道産の昆布漁の進歩や全国への流通・中国への輸出の歴史など今まで気付かなかった事柄について多数の質問をし講師の詳しい説明を求めていました。

子ども科学教室 第1回を開催

内容を充実し継続実施を計画

▲水質を検査して採水場所を判定する小学生

江別ユネスコ協会が、次代を担う青少年のためのプログラムとして本年度の活動計画に加えた「ユネスコ子ども科学教室」事業が 11 月 5 日(日)午前と 11 月 11 日（土）午前に実施されました。

当協会としては新しい試みですが、今般、酪農学園大学と江別市教育委員会との共催の形で開催することができ、日本ユネスコ協会連盟の「SDGs 活動補助金」を受けることになりました。

今回は小学校 5・6 年生を対象に、延べ 40 名の定員を設定して、市内の全小学校を通して 5・6 年生全員に開催チラシを配布して、参加者を募集しました。当初は夏休み期間の実施を想定していたのが秋学期に延びて参加者数が伸びなかったのは残念ですが、最初の一歩を踏み出すことは出来ました。第 1 回であっても内容は充実しており、1 日目は江別市コミュニティセンター研修室で行い、1 時間目は酪農学園大の馬場賢治教授が「地球の気温が上がるのはなぜ？そしてどうなるの？」というテーマで講義をしました。2 時間目は同大の中谷暢丈教授が「わたしたちの飲んでいる水のことを考えましょう」という講義をし、江別の水道水から世界の水不足まで幅広く学習しました。

2 日目は酪農学園大の教室で行い、吉田磨教授が「北海道の湿地・川・湖・海などの生き物」というテーマで講義し、どの先生も小学生に分かりやすい言葉で説明し、子ども達も納得した様子でした。広い大学構内の自然観察も行いました。

この事業は SDGs 活動推進のため日本連盟も期待しています。今後も継続して実施する予定で、多数の参加を得る方法などを検討して行きます。

江別“世界市民の集い”盛大に開催

当協会が加盟している江別市国際交流推進協議会が主催する「みんなおいでよ！江別“世界市民の集い”」が、今年も 10 月 15 日（日）午後、野幌公民館全館を会場にして開催されました。

現在この国際交流推進協議会には江別ユネスコ協会はじめ市内の大小 34 団体が加盟し、国際交流に関与する民間団体の連携協力を図っていますが、この「世界市民の集い」が年間事業の中核になっているようです。

今年も市内外の在住外国人や各国からの留学生多数が参加し、市内 4 大学の学生や高校・中学・小学生も多数集まって、近年では幼稚園児の参加も増えています。

ステージでは、留学生による民族舞踊、琴とバイオリンの合奏、留学生による自国紹介、中国獅子舞、キッズダンス、YOSAKOI 演舞、多文化共生の紹介など、各研修室では和服の着付け教室、茶道のお点前席、キッズゲームコーナー、お化け屋敷、国際交流活動の展示などが行われました。
大ホール内には 10 台超の各国料理の屋台が並び、一般食堂の味に負けない料理を提供しました。

さらに、折から江別に来ていた姉妹都市グレシャム市（米国）からの訪問団がこの会場を訪れ、和服の着付けを受けて、江別市長の先導でステージに登場したので、一同大喜びで歓迎し、館内は一段と賑わい、和やかに盛り上がりました。

主催の国際交流推進協議会には江別ユネスコ協会の会員が運営面で活躍しており、企画の段階から尽力しています。

▲世界各国から来ている留学生の皆さん

▼和服を着て喜ぶグレシャム市からの訪問団

ESD/ユネスコスクール研修会開く

第 9 回北海道 ESD/ユネスコスクール研修会が 11 月 18 日に北海道教育大の札幌駅前サテライトで開催され、約 40 名が参加しました。基調講演を北海道ユネスコ連協の大津和子会長が行い、各校の実践活動事例発表と意見交換がありました。

「小・中学校学習指導要領」（2017 年公示）に「持続可能な社会の創り手」の育成が掲げられ、各教科にも関連する内容が盛り込まれてから、道内 49 校のユネスコスクールでも、SDGs との取り組みは価値観の転換を求められています。ユネスコスクールの新規登録は狭き門になりそうです。

使用済み切手と書き損じハガキの回収

江別ユネスコ協会は、設立当初より「海外医療奉仕活動」を支援する目的で「使用済み切手」の回収活動を継続しています。近年SNSの発達により手紙・ハガキの使用が減り、切手の使用が激減していますが、まだ世界の切手蒐集家は健在です。

途上国の医療の向上のため、使用済み切手を捨てないで回収してください。少量でも結構ですので当協会事務局までお届け下さい。

また「書き損じハガキ」も日本ユネスコ協会連盟の「世界寺子屋運動」の支援のため回収活動を実施しています。個人情報は厳守しますので、枚数にこだわらず当協会事務局までお届け下さい。

江別ユ協の動きMEMO

（2023年2月～2024年1月）

◇カレンダーの国際交換　2月1日、日本らしい写真入りカレンダー14本をインドと韓国へ発送。

◇「江別国際センター冬の集い」に参画開催　2月12日開催、市国際交流推進協主催。会員多数出席。

◇事務局だより発行　3月9日号。4月4日号。

◇道内ユ協との機関誌交換　4月7日発送。

◇「ユネスコ活動のしおり」発行　No.33「ユネスコ活動に関する法律とは」4月22日。

◇江別ユ協・会計監査　4月27日（市教委会議室）

◇江別ユ協・役員会　4月27日（市教委会議室）

◇江別市生涯学習推進協議会・総会　4月28日（市民会館）押谷会長が出席。

◇江別市国際交流推進協議会・総会　4月28日（国際センター）角田副会長が出席。

◇北海道ユネスコ連絡協議会・常任理事会第1回　4月30日（札幌かでる2･7）田村副会長が出席。

◇道ユネスコ連協・総会　5月13日（かでる2-7）、交流会（ポールスターホテル札幌）、事務局長会議（かでる2･7）田村副会長が出席。

◇江別市都市提携委員会・総会　5月29日（市民会館）押谷会長が出席。

◇市民憲章推進協議会・総会　5月31日（市民会館）田村副会長が出席。

◇江別ユ協・総会　6月20日（野幌公民館）事業計画・予算決算・役員改選を審議。

◇講演会開催　6月20日（野幌公民館）「ハリオアマツバメの生態の謎」森さやか講師。

◇事務局だより発行　6月23日号。

◇日本ユネスコ協会連盟へ現況届提出　7月8日

◇事務局だより発行　7月21日号。

◇道ユネスコ連協・常任理事会第2回　7月15日（かでる2-7）押谷会長・田村副会長が出席。

◇都市提携委員会・祝賀会　土佐市姉妹提携40周年。7月29日（市民会館）田村副会長が出席。

◇都市提携委員員会・歓迎会　グレシャム訪問団（はやし野幌店）10月13日。田村副会長が出席

◇江別「世界市民」の集い　10月15日（野幌公民館）

◇第56回北海道ユネスコ大会　10月21・22日（ANAホテル千歳）押谷会長・田村副会長が出席

◇事務局だより発行　10月24日号

◇国連デー記念講演会　「世界と北海道の食料問題」　10月24日（京王プラザホテル札幌）

◇市国際交流推進協・総会第2回　10月26日（国際センター）角田副会長が出席。

◇子ども科学教室を開催　11月5日（江別市コミュニティセンター）、同11日（酪農学園大）

◇札幌ユ協設立70周年レセプション　11月6日（札幌パークホテル）田村副会長が出席。

◇第9回北海道ユネスコスクール研修会　11月18日、押谷会長・田村副会長が出席。

◇事務局だより発行　11月25日号。

◇市民学習会を開催　12月1日（野幌公民館）「和食の魅力」、遊佐順和講師。

◇江別市新年交礼会　1月4日（市民会館）

◇道ユネスコ連協・新年午餐会　1月28日（ポールスターホテル札幌）3名出席予定。

丹頂鶴と鳥インフルエンザ

―生物多様性の保護と感染症―

【時事雑感】　副会長 田 村 邦 雄

「ツルは千年、亀は万年」と言われ、めでたい動物の代表ですから、新年の話題には相応しいかと思います。丹頂鶴は通常タンチョウと呼ばれ、日本のツル類の中では大型で、代表的な種類です。

生息地は北海道東部が中心で、本州などでは殆んど見ることができません。日本では7種類のツルが観察されていますが、国内で繁殖するのはタンチョウ1種類だけです。大陸では中国の東北部やロシアの南東部にも生息しています。大陸のタンチョウは「渡り」をし、冬は朝鮮半島や中国南部に移動しますが、現在の日本のタンチョウは「渡り」をしません。

江戸時代までは北海道各地に多数生存し、関東では幕府が保護したことが知られ、歌川広重も「名所江戸百景」に三河島のタンチョウを描いています。しかし明治時代になると乱獲され、さらに生息地の湿原の開発により激減して、1889年（明治22）北海道庁は狩猟を禁止しました。やがて絶滅したと思われましたが、1924年（大正13）に釧路湿原で十数羽が再発見され、1935年に天然記念物に、1952年に特別天然記念物に指定されましたが、個体数は一向に増えず、1952年の大雪の日に農家が畑に置いた保存用トウモロコシを数羽のタンチョウが食べに来たのをきっかけにして、給餌（えさやり）に成功してから少しずつ増え、住民等が給餌して保護してきました。現在は環境省や道庁が給餌場を運営し、1日100羽以上が来る大規模給餌場が釧路管内に5か所、小規模給餌場が同管内に8か所、根室管内に3か所あります。

今、わたし達が深刻に捉えている問題は、タンチョウが鳥インフルエンザに感染し始めたことです。最初の感染例は、2022年11月20日に釧路市内で衰弱した状態で見つかった1羽で、釧路湿原野生生物保護センターに収容され、12月30日に死にました。それが、今シーズン（2023年9月以降）に入り連続的に4羽の死骸からインフルエンザウイルスが検出されました。10月25日に根室管内別海町で1羽、11月6日に標津町で1羽、15日に別海町で1羽の死骸が回収され、釧路管内標茶町でも14日に1羽が確認されました。今回タンチョウが感染した高病原性ウイルスは、致死率の高いH5亜型で、昨シーズン千歳など各地でニワトリが感染したタイプと同型ですが、環境省は、感染の関連性はないと見ています。今回の4羽の死骸の回収場所から半径3キロ内に養鶏場はありません。今後、給餌場に伝染すると集団感染が始まり、タンチョウが絶滅の危機に瀕します。

―昨年、鹿児島県出水市でツル類のナベズルやマナズルに感染して1500羽が死にましたが、周囲の養鶏場のニワトリが感染したウイルスとは「異なるタイプ」だと判明し、鹿児島大の小澤真准教授が「カモ類が運び役だったウイルスが、様々な鳥に感染しやすく変異し、ついにツルにまで感染した」と危機感を示したことと軌を一にします。

感染防止対策は、衰弱した個体の隔離や死骸の早期回収が第一ですが、道内の隔離場所はいま釧路湿原野生生物保護センターの2室だけです。環境省は給餌場の給餌量・給餌期間を調整し、給餌場の分散を進めて集団感染の防止を図っています。今後は給餌場の分散増設と、衰弱個体の監視、収容施設の新設・治療スタッフの確保が急務です。

とにかくタンチョウは「北海道の鳥」（1964年指定）です。道民として大切に保護したいものです。タンチョウの多くは、冬に餌がなくなると人間が設置する給餌場の餌で生きています。冬でも自力で餌が採れる筈のタンチョウから、その生存環境を奪ったのは、やはり人間なのでしょうか。

事務局　〒067-0074 江別市高砂町24-6
教育委員会・青少年係内☎381-1069 担当山崎